

言葉



小川真樹

若い頃に耳にした、たったひとことという言葉が、その人の内に沈着することがある。まるで心の奥に引っ掛かった魚の小骨のように、いつも気になり、生涯無くなることはない。私にはそれが2つある。

脚本家だった私の父は、何人かの若いお弟子さんたちを替わるがわる自分の書斎横の小部屋に寝泊まりさせ、共同でテレビドラマのホン(脚本)を書いていた。彼らの会話は家中に筒抜けで、子ども心に、親父はいつか殺されるのではないか、と思うほどの厳しい言葉を聞かされていたのだが、あるとき父がこんなことを言ったのだ。「おまえはホンのことばかり考えているから駄目なんだ。他の仕事を経験して出直して来い」と。それは、次に何が起るか身構えるほど恐ろしく、苛酷な言葉だった。

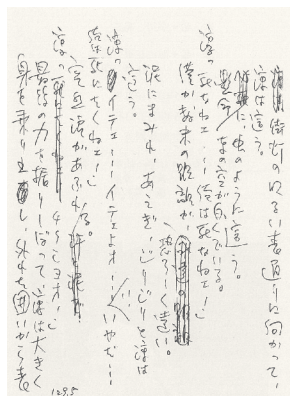
それから10年、藝大大学院時代に「樹形の構成原理と環境への対応」という研究をご一緒させていただいた恩師、奥村昭雄先生から、酒飲み話で忘れがたい言葉を聞いた。「でもね、本つてのは読まない方がいいんだよ。読むとそれで分かったような気になるでしょ？ そうすると自分で考えなくなるんだよ」というのだ。これは先達の言葉を聞くなともとれ、このシリーズのテーマ「温故知新」とは逆に思えるけれど、私にとっては、これが「温故」にほかならない魅力的な言葉だった。

引っ掛かった小骨をなんとかしたい私は、なかば否応なくこの2つの言葉を「いつも同じ土俵の中に居ては良いものはできない」、「既成の言説を鵲呑みにせず、自ら考えよ」と、自分に分かりやすく翻訳した。その結果

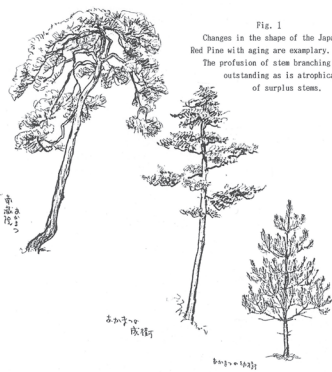
は、見方によっては何かに徹しきれない建築家が出来上がり、設計の得意分野はもとより、スタイルも定まらず、大学の講師としても、建築設計だけではなく専門外の「生物に学ぶデザイン」などまで担当するありさまとなった。それに満足はしていないが、後悔もしていない。

得意分野が無いと書きながら、最近の私はたまたま「お寺」の仕事が多い。もちろん専門ではなく50代になって初めてやらせてもらった用途なのだが、おもしろいことに寺院建築には決まり事が予想外に少なかった。つまり自由なのだ。歴史上の仏教建築には時代ごとの「型」があるが、それらに倣えとは誰も言わない。大切にすべきなのは型ではなく、その時代に現われる解釈なのだろうと思った。解釈であれば自分で考えねばならず、その根拠を先達に求めるのは筋違いとなる。たまたま出会った「お寺の仕事」が、何かを教えてくれたような気がしている。

もちろん、先人の素晴らしい仕事には日々打ちのめされ、そこから学ぶべきことは、ひとりの人間の一生には収まらないほど多いとも思っている。と同時に、我々が社会から求められることは急激に変化しており、従来の職業観の内に居てはいけなと多くの建築家が感じているだろう。これほどまでに根底から自分で考えることが求められる時代は無かったかもしれないが、仕事や建築教育の場で若い人たちに接するとき、彼らが敏感にそれを捉えていると感じることがある。その、まだ弱い知新の萌芽とともに考えていきたいと、今の私は思っている。



父の原稿「13日金曜日マカロニ死す」



奥村先生の黒松の形態変化スケッチ



私の近作「増上寺塔頭・宝珠院」の賑わい